

共同研究の経過と概要

小倉慈司

一 期間

二〇一〇年四月～二〇一三年三月

二 共同研究メンバー

安部聡一郎 金沢大学歴史言語文化学系
市 大樹 大阪大学大学院文学研究科
犬飼 隆 愛知県立大学日本文化学部
大橋 信弥 学識経験者
神野志隆光 明治大学大学院
新川登亀男 早稲田大学文学学術院
関 和彦 共立女子第二中学高等学校
關尾 史郎 新潟大学人文社会・教育科学系
高橋 一樹 武蔵大学人文学部（二〇一二年三月まで本館研究部・准教授）
田中 史生 関東学院大学経済学部
寺崎 保広 奈良大学文学部
中林 隆之 新潟大学人文社会・教育科学系

三上 喜孝 山形大学文学部
森下 章司 大手前大学総合文化学部
山口 英男 東京大学史料編纂所
吉岡 眞之 学識経験者
李 成市 早稲田大学文学学術院

◎小倉 慈司 本館・研究部・准教授
小池 淳一 本館・研究部・教授
高田 寛太 本館・研究部・准教授
永嶋 正春 本館・研究部・教授
○仁藤 敦史 本館・研究部・教授
平川 南 本館・館長

「リサーチアシスタント」

二〇一〇～一一年度 … 高木 理 早稲田大学・大学院生
二〇一二年度 … 大高広和 東京大学・大学院生

三 目的

国立歴史民俗博物館では二〇年以上にわたって正倉院文書の複製事業に取り組むとともに全国各地の木簡・漆紙文書・墨書土器・銅印など出

土文字資料の調査研究およびその体系化を図ってきた。また近年では、早稲田大学朝鮮文化研究所と共同して韓国内の木簡・石碑の調査を実施し、多くの研究成果を挙げてきている。本研究は、それらの研究蓄積を踏まえ、その総合化を図るとともに、これまで未着手であった文字資料の実物・画像データによる調査研究も実施し、広く東アジア世界を見通して、古代における文字文化の全体像を明らかにすることを目的とする。

具体的な課題としては、書写材料としての竹・木・紙・石・金属の使い分けの問題、古代中国・朝鮮・日本における文字資料の記載様式・内容の比較検討、文法・発音など字音表記の国語学的分析による古代朝鮮の複雑な実態とその影響を受けた古代日本の実態の解明、文字文化の伝播で大きな役割を果たした仏教・儒教・道教・呪術などの宗教的要素の解明などが挙げられる。

このような古代史学・考古学・国語国文学・民俗学などを踏まえた幅広い視点から日・中・韓の文字資料を比較検討し、東アジア全体の視点から見た新しい古代文字文化の受容過程、文字文化形成過程の実態を解明する。

四 共同研究の研究経過

二〇一〇年度

第一回研究会 六月一二日(土) 国立歴史民俗博物館

平川 南 共同研究計画の概要説明

本共同研究の研究計画の検討・確認を行う。

第一回調査 八月二日(月)～五日(木) 韓国羅州市・ソウル市

韓国羅州文化財研究所および国立中央博物館にて羅州伏岩里遺跡出土百済木簡および南山新城碑文等の調査を実施。

第二回調査 九月八日(水)～一二日(日) 韓国ソウル市・慶州市

韓国国立中央博物館・国立慶州博物館・国立慶州文化財研究所に

て所蔵・展示中文字資料の調査を実施。伝仁容寺址遺跡・月城垓子、風納土城等漢城期百済関連遺跡の現地調査を実施。

第二回研究会 一〇月三〇日(土) 国立歴史民俗博物館

武井紀子 「慶州雁鴨池出土文字資料調査報告」

三上喜孝 「日韓出土の「龍王」関係文字資料―資料紹介と若干の

検討」

李 成市 「韓日古代社会における羅州伏岩里木簡の位置」

平川 南 「日本古代の地方木簡と羅州木簡」

第一回・第二回調査の結果報告およびその検討。

第三回調査・第三回研究会 十一月二八日(日) 飛鳥資料館

秋季特別展「木簡黎明―飛鳥に集ういにしへの文字たち」展示中の七世紀木簡について調査、あわせて検討会を実施。

第四回調査・第四回研究会 三月二六日(土)～二七日(日)

大津市超明寺・安土城考古博物館

大津市超明寺にて養老元年碑を調査、安土城考古博物館にて滋賀

県内出土の古代印・木簡・文字瓦等を調査、引き続き検討会・研究会を実施。

橋本 繁 「韓国扶余旧衙里遺跡出土古代木簡について」

平川 南 「秋田由利本荘市出土古代印について」

二〇一一年度

第一回調査・第一回研究会 八月二九日(月)～三一日(水)

福岡県久留米市・小郡市等

久留米市埋蔵文化財センター、九州歴史資料館、大野城市教育委員会、太宰府市文化ふれあい館において、筑後国府跡・ヘボノ木遺跡等出土墨書刻書土器、大宰府史跡・井上薬師堂遺跡等出土木簡、牛頸ハセムシ古窯群出土刻書土器、大野城市内出土木簡・

墨書刻書土器、国分松本遺跡・大宰府条坊跡・宮ノ本遺跡等出土木簡・墨書刻書土器の調査を行い、調査終了後、検討会を開催した。九州歴史資料館にて熊本市二本木遺跡出土の出土印・刻書土器、および太宰府市文化ふれあい館で筑紫野市出土墨書刻書土器の調査も行った。

第二回調査・講演会 一〇月二日(水)～一五日(土) 韓国ソウル市 韓国国立中央博物館にて開催の特別展示「文字、それ以後―韓国古代文字展」に出陳された韓国内の主だった文字資料の調査・検討を行った。また一四日、同館にて開催のシンポジウムにて講演・報告を行う。講演・報告および題目は以下の通り。

平川 南 「古代韓国と日本の文字文化交流」

朴 方龍 (中央博考古歴史部長)

「韓国古代築城金石文の特性」

李 成市 「新羅浦項中城里碑にみる6世紀新羅碑の特質」

三上喜孝 「龍王」銘木簡と古代東アジア世界―韓日出土木簡研究の新展開―

朴 仲煥 (韓国金海博物館学芸研究室長)

「出土文字資料に表示される人名表記方法―百濟資料を中心として―」

李 鎔賢 (中央博考古芸研究士)

「佐波理加盤付属文書の検討」

なお同展示の準備に際して、種々協力を行った。

第三回調査 一二月二三(金)～二七日(火) 中国湖南省

同省長沙簡牘博物館・湖南省博物館において長沙走馬樓簡牘の予備調査を行った。

第三回研究会 三月一〇日(土) 国立歴史民俗博物館

今年度の実施事業報告および来年度計画の検討、また第二回・第

三回調査の報告等を行った。

橋本 繁 「韓国中央博物館特別展調査成果―新羅碑文の役名・職名を中心に」

武井紀子 「二〇一一年二月長沙走馬樓呉簡の調査報告」

李 成市 「秣軍墓誌研究のために」

平川 南 「扶余・東南里遺跡出土木簡」

その他、写真資料の画像データ化を継続して行った。

二〇二二年度

第一回研究会 六月二日(土) 国立歴史民俗博物館

橋本 繁 「高麗沈没船木簡・竹札について」

小倉慈司 「藤貞幹と古代朝鮮研究」

武井紀子 「兵庫県 吉田南遺跡出土木簡について」

第一回調査 八月五日(日)～九日(木) 韓国昌原市・木浦市等

韓国国立加耶文化財研究所にて城山山城木簡を調査し、また城山山城発掘現場踏査を行う。ついで国立海洋文化財研究所にて高麗沈没船木簡・竹札を調査。

第二回研究会 一〇月二八日(日) 国立歴史民俗博物館

武井紀子 「城山山城木簡 二〇二二年八月調査について」

橋本 繁 「高麗沈没船木簡・竹札の調査成果」

企画展示構成素案の検討

国際シンポジウムの打ち合わせ

国際シンポジウム「古代日本と古代朝鮮の文字文化交流」

一二月一五日(土)～一六日(日) イイノホール(朝日新聞社後援)

基調講演 金 英媛 (韓国国立文化財研究所長)

「新安海底沈没船の陶磁器と木簡」

研究報告 林 敬熙 (韓国国立海洋文化財研究所)

「高麗沈没船貨物票木簡」

市 大樹 「都の中の文字文化」

三上喜孝 「古代地方社会と文字文化」

梁 淑子 「韓国国立扶余文化財研究所」

「咸安城山山城の発掘調査と出土木簡」

李 鎔賢 「韓国国立春川博物館」

「近年発見された韓国古代文字資料の概要」

犬飼 隆 「古代日朝における言語表記」

山口英男 「正倉院文書に見える文字の世界」

李 成市 「古代日朝文化交流」

全体シンポジウム 司会 平川 南

パネリスト 宋 義政 「韓国国立中央博物館」

神野志隆光

第二回調査 二月一九日（水）～二二日（金） 太宰府市・福岡市

太宰府市文化ふれあい館にて国分松本遺跡出土木簡を調査。

福岡市埋蔵文化財センターにて元岡遺跡出土木簡、元岡G六号

墳出土大刀、鴻臚館出土木簡を調査。

第三回研究会 二月一日（月） 国立歴史民俗博物館

田中史生 第二回調査報告

歴博所蔵資料見学（木簡複製品、水木資料中の題籤軸等）

企画展示についての検討。

以上の他、三か年を通じ、長年行ってきた発掘直後の出土文字資料調査に際して撮影してきた写真資料を整理し、あわせてデジタル画像化を進めた。

五 研究成果

本研究はこれまで国立歴史民俗博物館において進めてきた古代文字文

化研究を、近年の研究調査や学界を取り巻く環境の進展を踏まえ、広く東アジア世界を見通してその総合化を図ることを目的として開始したものである。

当初の課題を大きく分ければ、地域として中国・朝鮮半島・日本列島、社会として都・中央と地方社会、時期として受容期（日本列島では主として七世紀以前）と発展期（日本列島では主として八世紀以降）などがあり、具体的テーマとして書写材料や字音表記、宗教的要素などが挙げられるが、このうち、中国地域に関しては諸般の事情により三年の間には十分に研究を進めることができず、今後の課題として残された。しかしその一方で朝鮮半島については後述するように新資料の発見や調査の機会に恵まれたことにより、当初想定していた以上の成果を挙げることができた。また地方社会という点については東北地域の検討も予定していたが、東日本大震災により、九州地域の調査に力を注ぐこととした。これも結果として、福岡県にて新資料の出土発見が続いたため、それらの調査に十分な時間を割くことができた。その他の点についてはほぼ当初の予定通りに研究が進められたと考えている。以下、具体的に記述することにした。

一年目は二度の海外調査を含む四度にわたる資料調査と研究会（館内二回、館外二回）を四回実施した。第一回の海外調査では、韓国羅州文化財研究所および国立中央博物館にて羅州伏岩里遺跡出土百済木簡および南山新城碑文等の調査を実施した。羅州伏岩里遺跡出土百済木簡は韓国で初の地方官衙出土木簡であり、これを調査することによって、七世紀初頭の百済における地方文書行政のあり方を具体的に検討することができた。同木簡は韓国出土の地方木簡を分析する上での指針となるものでもある。第二回の海外調査では、韓国国立中央博物館・国立慶州博物館・国立慶州文化財研究所にて所蔵・展示中文字資料の調査、また伝仁容寺址遺跡・月城孩子、風納土城等漢城期百済関連遺跡の現地調査を

実施した。これによって、新羅においても龍王祭祀が各地で行われていたこと、雁鴨池出土の刻書土器に見える「辛審龍王」「龍王辛」等の記載は東宮官の官司の一つである「龍王典」に関するものであつて、「審」は刻した工人が「番」を誤った可能性が考えられることなどが判明した。木簡に比し墨書土器や刻書土器は韓国ではまだ充分な研究対象となつておらず、今後、古代日本と比較しつつ検討を深めていくことが求められる。国内では、飛鳥資料館にて秋季特別展「木簡黎明―飛鳥に集うにしえの文字たち」が開催されたことを利用して七世紀木簡をまとめて調査、釈文を再検討することができた。また渡来人が多く居住し文字文化が地域社会に早期に浸透していた近江国地域の出土文字資料について調査を行い、あわせて真偽について議論のある超明寺養老元年碑の検討もおこなつた。

二年目は韓国国立中央博物館にて開催の特別展示「文字、それ以後―韓国古代文字展」に展示協力をおこない、同展示を利用して出陳文字資料の調査を実施、さらに同館にて開催のシンポジウムにて平川南、李成市、三上喜孝の三氏が講演・報告をおこない、韓国の学界に対して広く研究成果を公開することができた。また中国湖南省長沙簡牘博物館・湖南省博物館において長沙走馬樓簡牘の予備調査を実施し、簡牘の保管状況を把握するとともに木簡と木牘の使い分けなど今後の検討課題を抽出した。国内では久留米市埋蔵文化財センター、九州歴史資料館、大野城市教育委員会、太宰府市文化ふれあい館において、筑後国府跡・ヘボノ木遺跡等出土墨書刻書土器、大宰府史跡・井上薬師堂遺跡等出土木簡、牛頸ハセムシ古窯群出土刻書土器、大野城市内出土木簡・墨書刻書土器、国分松本遺跡・大宰府条坊跡・宮ノ本遺跡等出土木簡・墨書刻書土器等の調査を実施した。

三年目については中国走馬樓呉簡の調査の本格的な開始が諸事情により実施困難となる一方で、韓国国立海洋文化財研究所にて調査を進めて

いる高麗沈没船木簡の調査が幸いに可能となり、発掘が進んでいる城山山城の木簡とあわせて調査を実施し、韓国における最初期（六世紀半ば）の木簡と中世の木簡とを検討することが可能となった。国内では元岡G六号墳出土大刀に続き、太宰府市国分松本遺跡の「戸籍」木簡が出土公表されたことにより、鴻臚館出土木簡等も含めて調査を実施することができた。

さらに今年度は共同研究の最終年度および連動する五年間の科研の三年目にあたることから、成果報告として一二月に都内において二日間にあたる国際シンポジウムを開催し、延べ七八三人の参加者を得た。同シンポジウムでは韓国国立文化財研究所長および高麗沈没船木簡や城山山城の発掘調査担当者等を招聘して研究報告していただき、本共同研究の成果の一端を広く一般に紹介することができた。

これまで歴博にて収集してきた発掘直後の出土文字資料写真の画像デジタルデータ化については、共同研究と連動する科研が五年間であるため、共同研究終了後も加えた四か年計画での作業を予定しているが、今年度までに全体の分量の約三分の二まで終了した。

以上、三年間にわたる研究成果を紹介してきたが、これらの調査・研究においてはメンバー以外に出土資料所蔵機関関係者、遺跡発掘担当者、古代史研究者、補助業務従事の大学院生等も加わり、多大な御協力を得たことをここに述べておきたい。

この三年間の共同研究の成果については国際シンポジウムおよび本特集号に加えて、二〇一四年秋に人間文化研究機構連携研究「正倉院文書の高度情報化研究」とも協力し、また韓国国立中央博物館・韓国国立文化財研究所の協力を得て、企画展示「文字がつなぐ―古代の日本列島と朝鮮半島」を開催する予定である。同展示では、日本列島と朝鮮半島との文字文化交流に焦点を当て、1. 文字の権威と支配、2. 文字と信仰、3. 学問も含めた生活文化、4. 文字を受容し使いこなすにあたっての努

力、5・八世紀以降、中国大陆からの直接的影響が強まるなかでの日本列島と朝鮮半島との関係、に重点を置き、かつ文字文化交流の背後に存在する人的交流、また近年、韓国で調査研究が進んでいる高麗沈没船出土中世木簡についても紹介する予定でいる。これらに加えて二〇一四年一月から二月にかけて名古屋博物館において開催される特別展「文字のチカラ―古代東海の文字世界―」へも協力を行なっている。出土文字資料画像については、企画展示において活用する他、二〇一五年度にネットにて公開する準備を進めている。

最後に、本特集号も含めた以上の研究は、科学研究費補助金基盤研究(A)「古代における文字文化形成過程の総合的研究」(平川南代表)20242021の成果でもあることを付け加えておきたい。

(国立歴史民俗博物館研究部)